



Title	未来共生リーディングス 5号 編著者紹介・執筆者紹介
Author(s)	
Citation	未来共生リーディングス. 2014, 5, p. 119-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54483
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◎ 編著者紹介

大場 麻代（おおば・あさよ）

大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教。英国サセックス大学国際教育センターで博士号取得（教育学）。青年海外協力隊員、小学校講師、広島大学教育開発国際協力研究センター研究員などを経て現職。主な著作に、「中等教育授業料撤廃と小学校修了者の反応—マクエニ県での追跡調査から—」澤村信英／内海成治編『ケニアの教育と開発—アフリカ教育研究のダイナミズム』（明石書店、2012）など。

「キベラでの研究は、教育省の統計には表れない子どもたちや学校の存在がその始まりでした。何度も足を運ぶうちに先生方と知り合いになり、世帯訪問では、病床からお婆さんが起き上がり手を握って再訪問を喜んで下さった時には涙が溢れました。教育が子どもたちにとって常に希望であり続けるよう、現地の人びとと一緒に考え続けていきたいです。」

◎ 執筆者紹介

川口 純（かわぐち・じゅん）

JICA 研究所研究員。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科で Ph.D. 取得。青年海外協力隊員、高校講師などを経て現職。主な著作に、「保護者からみた初等学校の機能と価値について—マラウイの公立学校を事例として—」アフリカ教育研究、「マラウイにおける教員養成課程の変遷に関する研究—教員の社会的地位とモチベーションに注目して—」日本比較教育学研究など。

「以前はマラウイの現地調査では初等学校を対象にすることが殆どであったが、最近、中等学校を対象にする機会があった。青年海外協力隊時代に中等学校の教員養成大学で講師をしていたため、調査の際に教え子に遭遇することが多い。ついつい調査は後回しになり、旧交を温め、そのまま飲みに行ってしまうことがあるが、その飲み屋での話がゆくゆく研究にも活かされるのではないか、と希望的観測（言い訳）を持っている。」

中村 由輝（なかむら・ゆき）

株式会社フジタプランニング（開発コンサルタント）。大阪府立高校教員を経て英国エディンバラ大学アフリカ研究センターにて博士号を取得（PhD in African Studies）。2008年6月より2013年6月まで南スーダンにて教員研修プロジェクトに関わる。著作 Nakamura, Y (2008) Supporting Self-help: CanDo Japanese NGO in Kenya, Saabruken, VDM Verlag Dr. Müller

「南スーダンの学校の状況は5年間でもかなり改善さ

れたと思うけれど、隣国と比較すると改善されたとも思われない状況です。ただ、どの学校へ行っても、人々の平和な日々と教育を求める声が強いのが印象的です。『もう戦いはたくさんだ。』『国外に避難するようなことはしたくない。』『教育を受けて、地域のために働けるようになりたい。』そのような願いが叶う日が来ることを祈らずにはいられません。」

興津 妙子（おきつ・たえこ）

株式会社国際開発アソシエイツパートナーメント・エキスパート、独立行政法人国際協力機構（JICA）人間開発部インハウス・コンサルタント（教育分野課題分析）。教育学博士（サセックス大学）。UNICFF カンボジア事務所副広報官、外務省経済協力局開発計画課外務事務官（国際教育協力担当）等を経て現職。主な著作に「ザンビアの郡教育行政における住民参加の制度と実態に関する一考察」国際教育協力論集第15巻第1号（2013）他。

「本稿の調査時、車でのアクセスがままならない学校への訪問時など、ボランティア教員が交代で自転車の荷台に乗せて学校まで連れていってくれた。その中には、元々日本で放置自転車として収容されたと思しきものもあり不思議な縁を感じたものである。荷台から振り落とされないように必死で彼らにつかりながら、互いのよもやま話に花を咲かせたが、後から考えると、これは彼ら・彼女らとの信頼関係を築きボランティア教員の置かれている実情を理解する上で貴重な時間となった。」

齋藤 健介（さいとう・けんすけ）

名古屋大学国際開発研究科博士後期課程。青年海外協力隊（セネガル）、JICA研究所非常勤助手、JICA専門家などを経て現職。主な著作に、「セネガルにおける住民参加型学校運営に関する研究－地域住民の意識と行動の違いに注目して－」『比較教育学研究』第46号、pp.80-101（2013年）など。

「セネガルでの青年海外協力隊が終わった直後にフィールドワークを行なった為、里帰りをしたかのようにセネガルの皆さんに迎え入れてくれた。フィールドワークでは学校の中から地域を見るのではなく、地域の人々の目で学校を見る様に心がけインタビューに協力していただいた方の一人ひとりの言葉を掬い取つていった。その土地に暮らす人々の息遣いが少しでも感じられるような論文になっていれば幸いである。」

島津 侑希（しまづ・ゆき）

名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程在学、日本学術振興会特別研究員（DC2）。2009年愛知教育大学教育学部卒業、2011年名古屋大学大学院国際開発研究科博士前期課程修了、現在に至る。研究テーマは、ジェンダーと教育、教育に影響する社会・文化的要因、技術教育・職業訓練。

「現地では、インタビューおよび参与観察を中心とした質的調査を行っています。そのため、調査対象者どのようにコミュニケーションを取るか、自分の立ち位置をどこにするのかを常に課題としています。」

清水 貴夫（しみず・たかお）

総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト）。明治学院大学卒業後、NGO職員、名古屋大学大学院文学研究科（修士（文学））等を経て現職。専門は文化人類学、アフリカ地域研究。アフリカ教育研究フォーラム「優秀研究特別賞」受賞（2013年）。主要調査地はブルキナファソ、ニジェール等西アフリカ内陸部。主な著作に、「少年は都市を飼い慣らす」SEEDer編集委員会（編集長 秋道智彌）『SEEDer』（No.8）：23-29（昭和堂、2013）、「都市計画と住民生活の変化～ワガドウグ市のザカ計画 Projet ZAKA とザンゲエテン住民の事例から～」『九州人類学会報』（38）：31-41（九州人類学研究会、2011）など。

「旅行者、NGO職員、研究者と立場を変えながらこの地域に関わり、やってみたい研究や活動、行ってみたい場所は数知れず。行けばいくほどにアフリカの魅力にはまり込んでいます。」

田中 千聖（たなか・ちさと）

教育開発コンサルタント。2014年1月よりマラウイ国中等理数科教育改善プロジェクトに赴任。英国サセックス大学でPh.D.取得（国際教育）。理科教諭、青年海外協力隊（ネパール）、JICAジュニア専門員、JICA専門家、開発コンサルタントを経て現職。主な著作に、An exploration of teacher incentives: experiences of basic schools in rural Ghana (2012). In:

Ginsburg, M. (Eds.) *Preparation, Practice and Politics of Teachers: Problems and Prospects in Comparative Perspective*. Rotterdam, Sense Publishers など。

「ガーナの理数科教育プロジェクトに2年間関与した際に、たくさんの小中学校教員に会いましたが、『教えることは好き、でも教員ではいたくない。』と常々聞かされました。政府も教員を惹きつけようと政策を展開しているのを知っていたので、「なぜ」から始まった調査でした。」

未来共生リーディングス volume 5



RESPECT

多様なアフリカの教育

ミクロの視点を中心に

大塙 麻代 [編]

2014年 3月発行

発行：大阪大学未来戦略機構第五部門（未来共生イノベーター博士課程プログラム）

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町1-2

文理融合型研究棟6階

E-mail: respect@iai.osaka-u.ac.jp

Website: <http://www.respect.osaka-u.ac.jp>

制作／印刷：有限会社ブックポケット